『愛知大学史研究』第3号の刊行にあたって

大島隆雄
〈愛知大学名誉教授、東亜同文書院大学記念センター客員研究員〉

「愛知大学東亜同文書院大学記念センターの情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究の推進プロジェクト」が、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業（オープン・リサーチ・センター整備事業）に選定されて、今平成21（2009）年度にはその第4年度目に入っている。この間、研究成果は、まずは3回にわたる『オープン・リサーチ・センター年報』（第1号2006年度、第2号2007年度、第3号2008年度）の発行に示されている。しかし同時に愛知大学が東亜同文書院大学の後継校と位置づけられているため、東亜同文書院及び同大学から愛知大学への転化の問題が不可欠の問題となり、その範囲内で愛知大学史研究が推進されてきた。その分野の研究成果は、これまた2度にわたる『愛知大学史研究』（第1号2007年度、第2号2008年度）となって結実しているが、幸い今年度もその3号を発刊できることになった。

本プロジェクトを開始するにあたって、愛知大学史部門は、研究すべき主なテーマとして次の2つを設定した。(1)「東亜同文書院大学から愛知大学への発展の理論的・実証的研究」と、(2)「愛知大学の父たち――本間喜一、小岩井淨、林毅陸――の学問と思想」がそれである。

本号がこれらの研究テーマに即して、画期的な成果を公表できることは、編集者として喜ばしい限りである。それは愛知大学名誉教授、藤城和美氏の単行本にも比肩する量をもった大論文、「小岩井淨と人民戦線――愛知大学創立の思想的断面――」を収録できたことである。愛知大学創立の中心的人格は、もちろん本間喜一氏ではあったが、小岩井氏はその本間氏を支えた第1の援助者であった。この小岩井氏は、「新人会」に所属していた東京帝国大学を1922年に卒業後、大阪で弁護士となり、1920年・30年代に厳しい弾圧を繰り返しうけながら、当時の反体制派の代表的知識人として闘ったことでよく知られている。そのため彼は、これまでも、愛知大学関係者以外にも、井手康弘、羽多野圭二、岩村登志夫、といった歴史家の研究対象となった人物であった。

愛知大学関係では、もと学長細迫朝夫氏が小岩井研究を始められていたが、小岩井学長のゼミに所属しその謦咳に接せられた藤城氏は、すでに愛知大学在職中の1999年から2002年にかけて、8回にわたって「小岩井淨と人民戦線――日本ファシズム論と人民戦線論をめぐって――」（『愛知大学法経論集』150、151、152、153、154、155、156、159号）という長大な論文を発表されてきた。また氏は、本プロジェクトが始まってからまもなく、2006年12月2日の本記念センター主催の公開研究会において、「小岩井淨と人民戦線」と題した講演をおこなわれた。今回の本論文は氏の長年にわたる小岩井研究の集大成であって、愛知大学創立者の1人小岩井氏に関する研究は、愛大関係者の責任でもあったから、それがそこから生まれてきたことをほんとうに嬉しく思う。

また本号は、愛知大学創立期に関連して、2人の若い研究者の論稿を収録した。その1つは、東亜同

文書院で中国語を学び、戦前日本と中国の仏教徒との交流のために活動したが、敗戦直後、豊橋に居住していたため、愛知大学の創立を支援した、真宗大谷派の僧侶藤井草宣氏の1930年代、40年代の活動に関する、広中一成氏の実証的研究である。そしていま1つは、1946年豊橋の軍事施設跡に愛知大学が創立されるが、そのとき陸軍教導学校と予備士官学校の施設がどのように愛知大学の施設に転用されていったかを明らかにした、佃隆一郎氏の論文である。

さらに本号は、2009年3月14日におこなわれた大島隆雄の講演「東亜同文書院大学から愛知大学への発展――たんなる継承か、それとも質的発展か――」と、その討論とを収録している。それは、愛知大学が東亜同文書院大学のたんなる継続ではなくて、敗戦後のGHQ／CIEによる教育民主化過程で、国家主義を払拭して生まれた新しい質の大学であり、そしてそれゆえにこそ、東亜同文書院および同大学の肯定的諸側面を継承できたという内容のものである。これは、最初に設定された「東亜同文書院大学から愛知大学への発展の理論的・実証的研究」における、講演者の過去3年間の研究蓄積のいわば中間報告である。